

GXS-E003-00

EDIサービス

<IE/EX>

<国際 IE>

Expedite Base for Windows

バージョン4.7.2

補足説明書

第1.3版

GXS株式会社

まえがき

Expedite Base for Windowsは、お客様のWindows環境でEDIサービス<IE/EX>、<国際IE>とデータの送受信を行うための、プログラム・インターフェース機能を備えたプログラムです。

本書は、<IE/EX>、<国際IE>に接続するために必要な登録、プログラムの導入方法、Expedite Base for Windowsの始動と簡単な接続テストの方法を補足説明したものです。

お客様環境にあわせたカスタマイズについてはExpedite Base for Windows Programming Guide - Version 4.7をご参照ください。

対象読者

本書は、EDI知識を持つシステム・エンジニア、またはシステム管理者の方を対象にしています。

また、Windows 2000 Professional、Windows XP、Windows Server 2003についての基本的な知識も必要になります。

初版	2005年 6月	Expedite Base for Windows バージョン4.7.2補足説明書
第1.1版	2005年 10月	Expedite Base for Windows バージョン4.7.2補足説明書
第1.2版	2006年 4月	Expedite Base for Windows バージョン4.7.2補足説明書
第1.3版	2008年 10月	Expedite Base for Windows バージョン4.7.2補足説明書

このマニュアルの内容は、その製品、サービスの改良その他により適宜変更されることがあります。

(c) 2006 GXS, Inc. All rights reserved.

Windowsは、Microsoft Corporationの登録商標です。

目次

1. 概要	1
サービス形態	1
Expedite Base for Windows の作業について	1
2. 登録	2
2.1. TCP/IPダイヤルアップ接続の申請書と記入要領	2
2.2. TCP/IP専用線接続の申請書と記入要領	2
3. Expedite Base for Windows の導入	3
3.1. システムの前提条件	3
3.2. マニュアルのダウンロード	4
3.3. プログラムの導入手順	5
3.3.1 導入前の準備確認	5
3.3.2 導入作業	6
4. Expedite Base for Windows の始動	11
4.1. コマンド・ファイル(basein.pro / basein.msg)の作成	11
4.3. TCP/IP 通信による接続テスト	12
4.3.1 AT&T Global Network Client の準備	12
4.3.2 プロファイル・コマンドファイル(basein.pro)の作成と編集	13
4.3.3 メッセージ・コマンドファイル(basein.msg)の編集	15
4.3.4 セキュア IP サービスへの接続を確立	15
4.3.5 Expedite Base for Windows の起動	15
5. Expedite Base for Windows のカスタマイズ	17
5.1. コマンド・ライン・パラメーターの設定	17
5.2. PD のためのトレース収集	18
付録 A. リカバリー・レベルのコミット	19
1) ファイル・レベル・リカバリー	19
2) ユーザー・レベル・リカバリー	20
3) チェック・ポイント・レベル・リカバリー	21
4) セッション・レベル・リカバリー	21

付録B. リカバリー・レベルと送信／受信フロー	22
-------------------------------	----

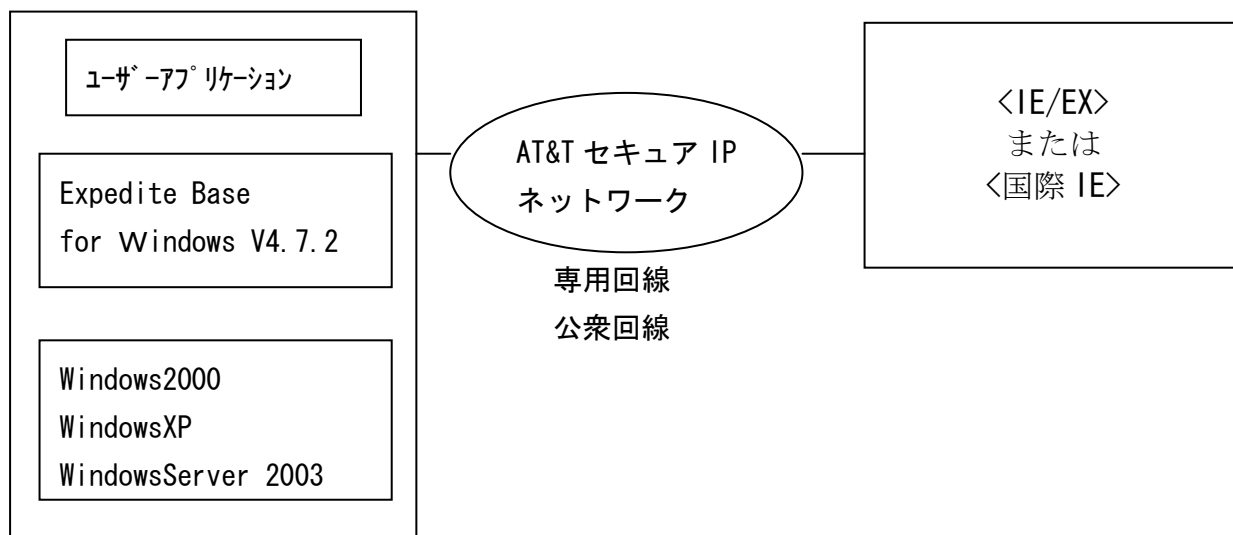
1. 概要

サービス形態

Expedite Base for Windowsを使用した概要図は下記のようになります。

PC

EDI サービス



Expedite Base for Windowsシステム概要図

Expedite Base for Windowsの作業について

- ◆ プログラムとマニュアルの入手
 - ・ インターネット・ダウンロード
- ◆ EDI サービスへの登録
- ◆ プログラムの導入作業
- ◆ 簡単な接続テスト
- ◆ 必要なカスタマイズ

2. 登録

2.1. TCP/IPダイヤルアップ接続の申請書と記入要領

次の2種類の申請書を提出して下さい。

- ◆ 『セキュアIPリモートアクセス ユーザー登録申請書』
Expedite欄の‘YES’にチェックをし、コメント欄に‘**BASE/WIN (TCP/IPリモート)**’と記入して下さい。

- ◆ 『NMS <IE/EX>ユーザー登録申請書』
通常の<IE/EX>ユーザー登録申請の要領で記入して下さい。
IEの欄の所属システムで「国内」/「国際」を選択し、プロトコルには「EXP/WIN」と記載して下さい。
コメント欄には Expedite Base for WindowsをTCP/IP接続で使用するユーザーIDだと分かるよう必ず‘**BASE/WIN(TCP/IPリモート)**’と記入して下さい。

2.2. TCP/IP専用線接続の申請書と記入要領

次の2種類の申請書を提出して下さい。

- ◆ 『セキュアIP申請書』
ご利用のサービスで「Expedite」を選択し、コメント欄に‘**BASE/WIN**’と記入してください。

- ◆ 『IE/EX申請書』
通常の<IE/EX>ユーザー登録申請の要領で記入して下さい。

3. Expedite Base for Windows の導入

3.1. システムの前提条件

このプログラムをお使いになるには、次のハードウェアおよびソフトウェアが必要です。Programming Guide の 'Chapter2. Installing Expedite Base for Windows' もご参照下さい。

◆ ハードウェア

- サポートされるオペレーティングシステムが稼動するPC/AT互換機
- TCP/IPダイヤルアップ接続を利用する場合、Windows2000、WindowsXP、Windows Server 2003のOS標準TCP/IPやハードウェア(モデムなど)が必要です。
- TCP/IP専用線接続を利用する場合、専用線と専用線を接続する為のハードウェアが必要です。

◆ ソフトウェア

- サポートされるオペレーティングシステム
 - Microsoft Windows 2000 Professional
 - Microsoft Windows XP
 - Microsoft Windows Server 2003(全OSにつき最新のサービスパックのご利用をお勧めします)
ただし、AT&TダイヤラーはWindowsServer2000/2003をサポートしていないため、WindowsServer2000/2003ご使用の場合はOS標準のダイヤルアップによる接続、またはダイヤルアップルータなどをご使用いただく必要があります。

3.2. マニュアルのダウンロード

マニュアルは以下のサイトよりダウンロードすることが可能です。

https://www.gxsolc.com/public/EDI/us/support/Library/ExpBaseWin_Library.html

マニュアル番号 : GC34-2253-06

名称 : Expedite Base for Windows Programming Guide – Version 4.7

3.3. プログラムの導入手順

3.3.1 導入前の準備確認

・ Expedite 旧バージョンの削除

すでに以前のリリースのExpediteが導入されている場合、以前のリリースのExpediteを一度アンインストールしてから新規でExpediteを導入することをおすすめします。

必要ファイルのバックアップをとり、コントロールパネルのプログラムの追加と削除より一度Expediteをアンインストールし、さらに以前のリリースのExpediteの導入ディレクトリー（デフォルトインストール時はC:\expedite）を手動で削除の上導入して下さい。

また以下のことに注意して下さい。

- ◆ 前回のセッションでsession.filファイルが存在する場合は、正常に終了させる
かりセットをして下さい。session.filファイルが存在しないことをご確認ください。
さい。
- ◆ basein.pro、basein.msgファイルはバックアップをとり、導入後Expediteの導入デ
ィレクトリーへコピーして下さい。

・ ダイアラーの導入および設定

お客様 PC の要件によって接続方法が変わります。AT&T ダウンロード・センターへアクセスし、ご確認ください。ユーザーガイド類をダウンロードします。
ダウンロード・センターURL <http://www.jp.att.com/download/>

2008年10月現在のAT&Tダイアラー日本語版最新バージョンは

AT&T Global Network Client V7.2.1（日本語版）

です。

ダウンロード後、ユーザーガイドに従って導入および設定をして下さい。

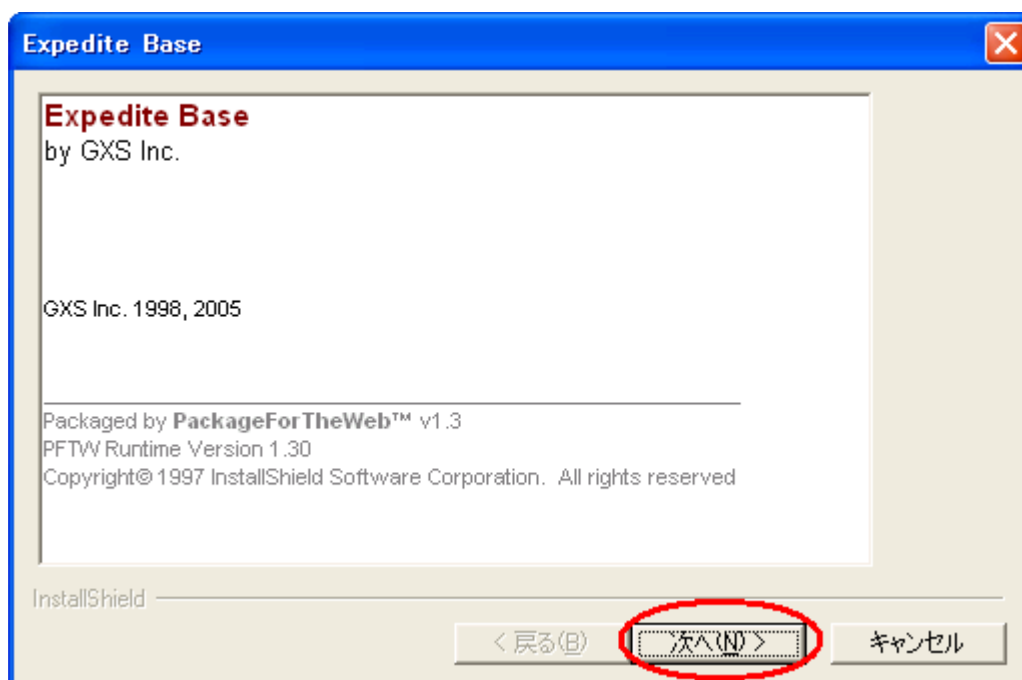
(注)

AT&TダイアラーV7.2.1日本語版は、従来可能であったExpediteから自動的に接続を確立する機能に対応していませんのでご注意ください。それに伴い、TRANSMITコマンドのCOMMTYPE(C)は使用出来ません。

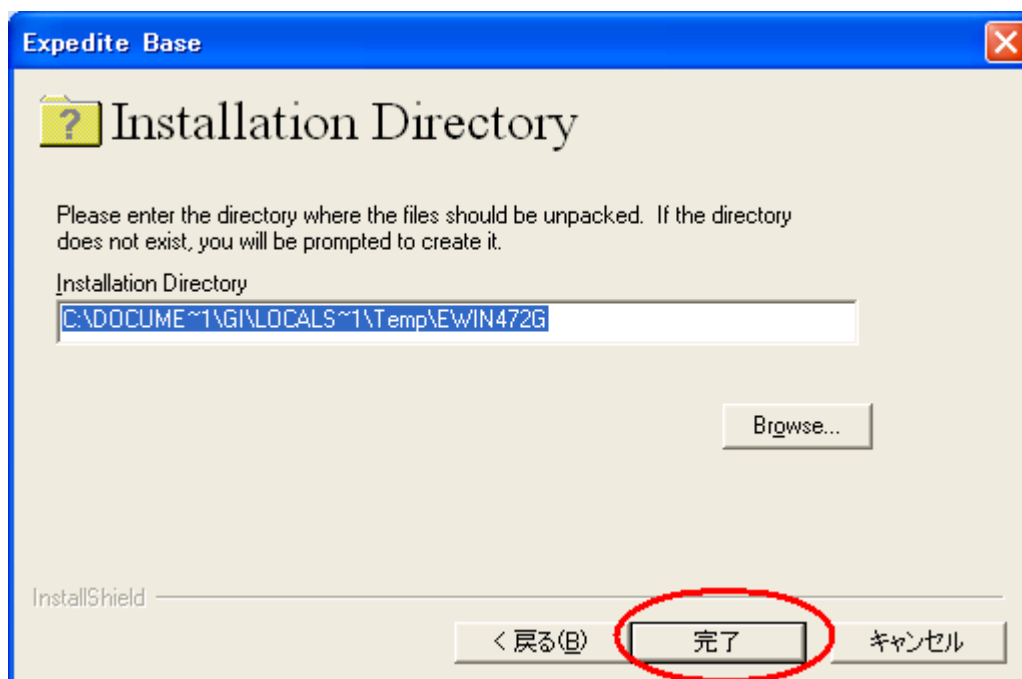
『4.3.2 プロファイル・コマンドファイル(basein.pro)の作成と編集』参照

3.3.2 導入作業

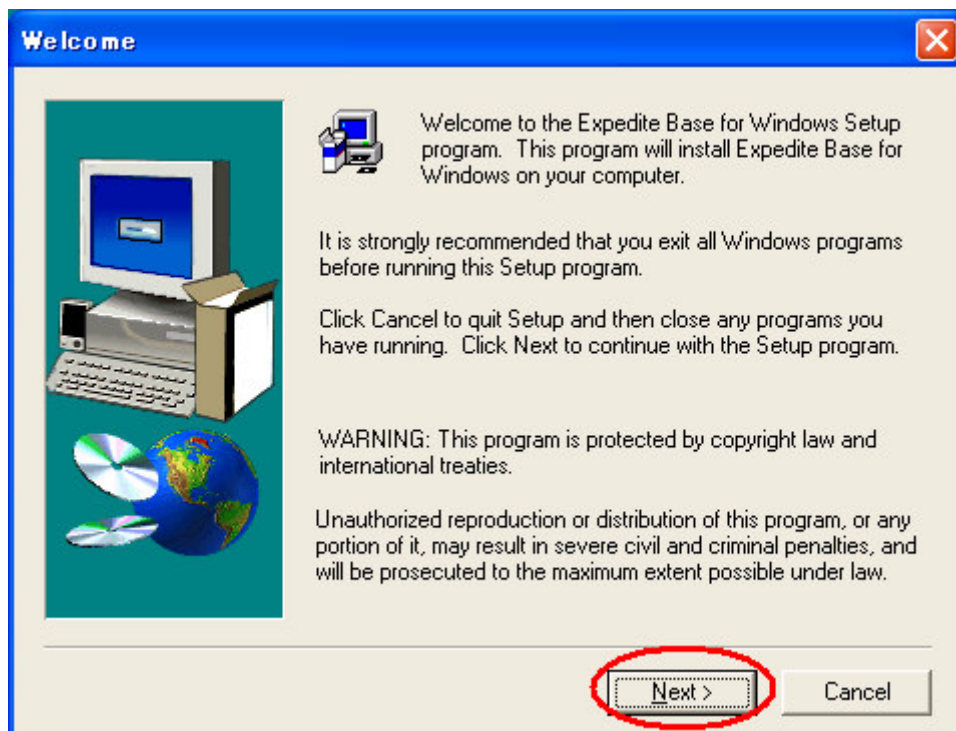
1. インターネットからダウンロードしたアプリケーション・ファイル Expbase472.exe を実行して下さい。[次へ]をクリックして下さい。



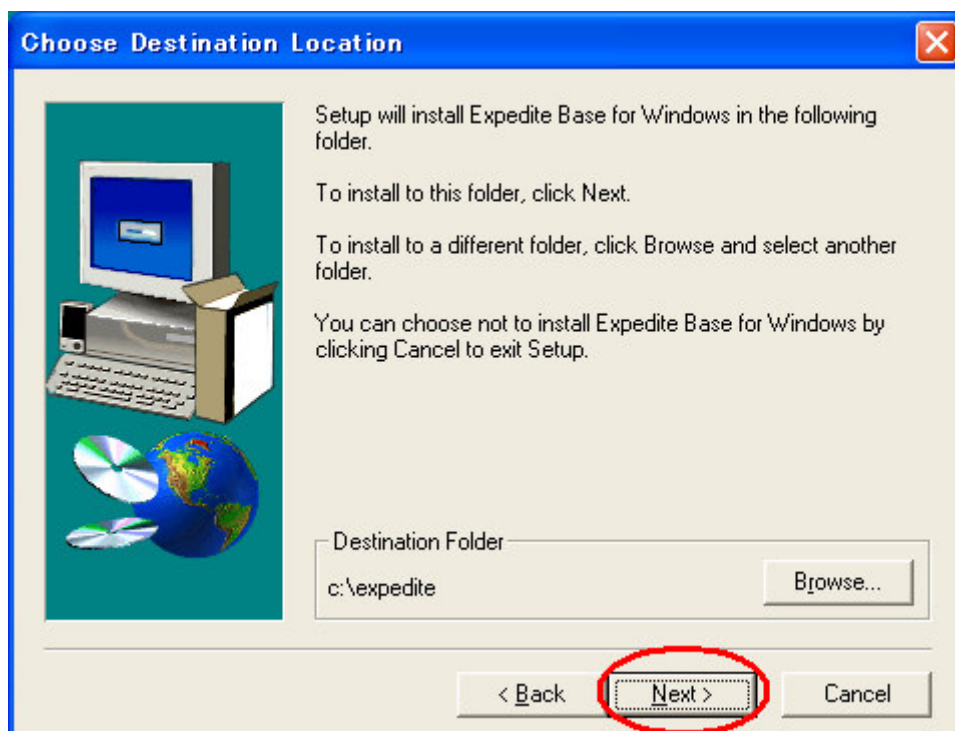
2. テンポラリーディレクトリーの指定画面が表示されます。そのまま[完了]をクリックして下さい。



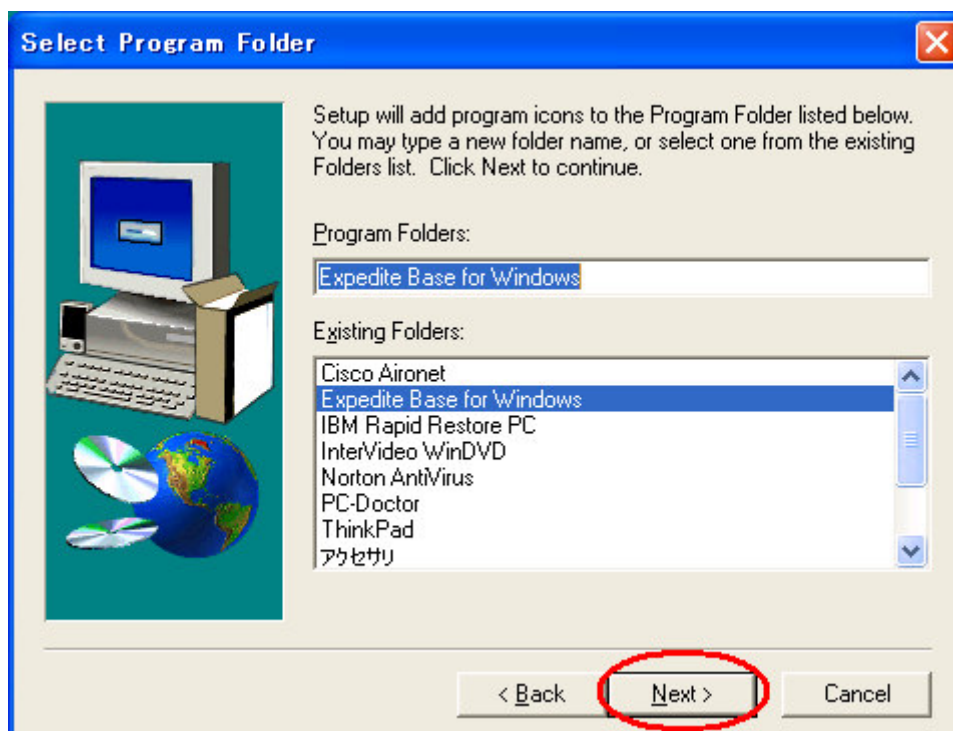
3. 指定したディレクトリー内にファイルが作成され、セットアップ画面が表示されます。説明を読んだ後、[Next] をクリックして下さい。



4. 導入するディレクトリーを確認後、[Next] をクリックして下さい。



5. アイコンを追加する場所を指定します。デフォルトで『Expedite Base for Windows』が表示されていますので必要に応じて変更し、[Next] をクリックして下さい。

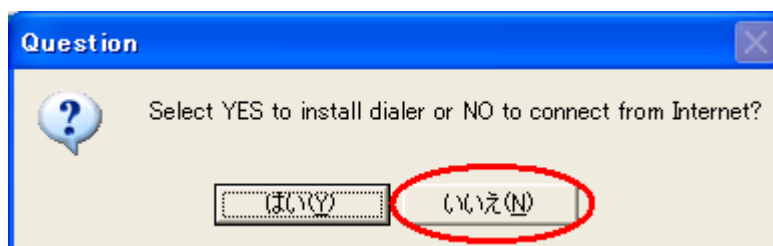


6. 『Select YES to install dialer or NO to connect from Internet?』が表示されます。**[いいえ]** をクリックして下さい。

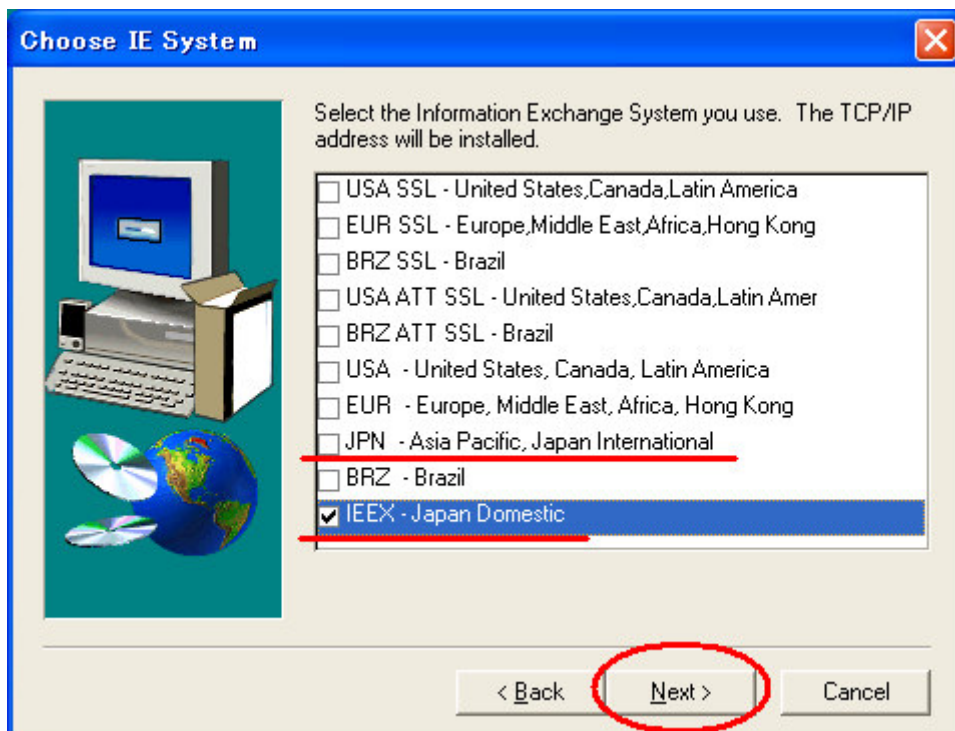
(注)

『3.3.1 導入前の準備確認』でAT&Tダイヤラー日本語版が導入済みのため、ここでは導入の必要はありません。未導入の場合は後で『3.3.1 導入前の準備確認』を確認いただき、導入および設定をして下さい。

『はい』をクリックした場合、AT&Tダイヤラー英語版が上書きで導入されます。AT&Tダイヤラー日本語版の導入および設定が再度必要になりますのでご注意ください。



7. 接続先ホストを選択し、[Next] をクリックして下さい。



<国際IE>をご利用の場合 JPN - Asia pacific, Japan International
<IE/EX>をご利用の場合 IEEX - Japan Domestic
にチェックを入れ[Next]をクリックして下さい。

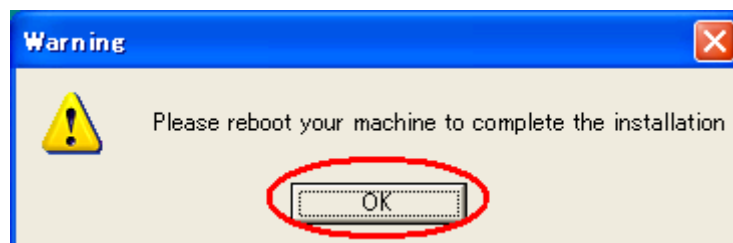
それぞれhostname. filファイルに

<国際IE>をご利用の場合 166. 100. 65. 33 3002

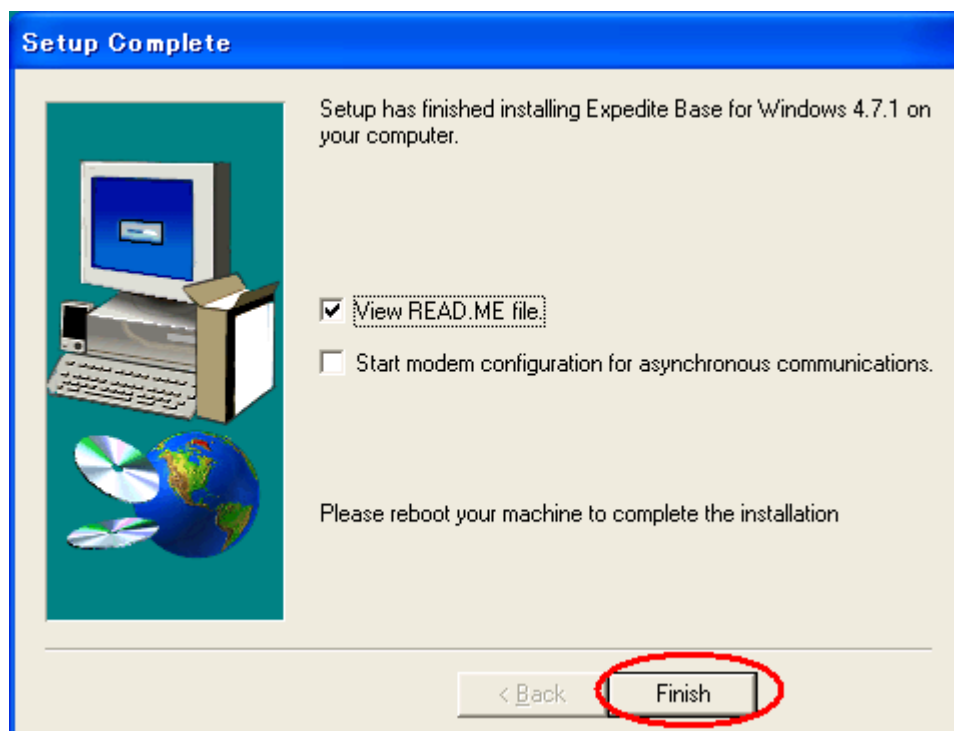
<IE/EX>をご利用の場合 166. 100. 65. 33 3003

がセットされます。後で直接hostname. filファイルの内容を書換えて使用することも可能です。

8. ファイルのコピー後、セットアップは完了します。[OK]をクリックして下さい。



9. これで導入完了です。[Finish]をクリックして下さい。
read.meメモが表示されます。



10. インストール完了後、PCを再起動して下さい。

11. 旧バージョンよりバージョンアップの場合は再起動後、『3.3.1 導入前の準備確認』でバックアップをとったファイルを新しく導入したExpediteのディレクトリーにコピーして下さい。

(注)

旧バージョンよりアップデートを実施した場合、導入したExpediteのディレクトリーにiebase.proが残っていることがあります。誤動作の原因になるため、万一あった場合には手動にて削除をしてください。デフォルトでアップデートを実施した場合、C:\%expedite%\iebase.proにファイルはあります。この作業はセッション開始までに一度だけ行う必要があります。

4. Expedite Base for Windows の始動

お客様のPCにExpedite Base for Windowsを導入した後のIE/EXサービスとの接続テストを、以下の手順で行って下さい。

4.1. コマンド・ファイル(basein.pro / basein.msg)の作成

Expedite Base for Windowsは、プロファイル・コマンドファイルとメッセージ・コマンドファイルの2つのファイルを作成してからiebase.exeコマンドを実行することにより、データの送受信を行うことができます。これらのコマンドは、Programming Guideを参照すれば作成できますが、あらかじめサンプル・ファイルが用意されていますので、ここではそれらを利用してテストを行います。

サンプル・ファイルはExpedite Base for Windowsを導入したディレクトリーのサブディレクトリー(Samples)に次の名前が入っています。

tcplsamp.pro	(TCP/IP接続のプロファイル・コマンドファイルの例)
basemsg.in	(メッセージ・コマンドファイルの例)
sampstest.fil	(テストで使用するサンプル・データ)

ファイルの名前を次のように変更してExpediteのディレクトリーにコピーして下さい。Expedite指定ファイル名は、必ずこのファイル名を指定してください。プログラムではこのファイル名で認識しています。

変更前	変更後
tcplsamp.pro	=> basein.pro (Expedite指定ファイル名)
basemsg.in	=> basein.msg (Expedite指定ファイル名)
sampstest.fil	=> 変更なし

4.3. TCP/IP通信による接続テスト

ここでは、AT&Tダイヤラー日本語版を使用してTCP/IP接続をし、Expedite Base for Windowsを開始し、ファイル送受信テストを行います。専用線接続の場合にも、同様の方法でテストを実施します。

4.3.1 AT&T Global Network Clientの準備

TCP/IP 専用線の場合にはこの準備は不要です。

AT&Tダイヤラー日本語版のセットアップを行い、TCP/IPの接続を事前に確認をします。AT&Tダイヤラー日本語版のセットアップの詳細は、AT&Tジャパン株式会社より発行しているユーザーガイドをご参照下さい。

AT&Tダイヤラー日本語版のユーザーIDを利用して<IE/EX>、<国際IE>へ接続する場合には、あらかじめ登録作業が必要です。「2.1. TCP/IPダイヤルアップ接続の申請書と記入要領」をご参照ください。

(注)

1. AT&Tダイヤラー日本語版はWindows Server2000/2003をサポートしていません。WindowsServer2000/2003ご使用の場合は、Windows OS標準でのダイヤルアップまたはダイヤルアップルータなどをご使用する必要があります。

4.3.2 プロファイル・コマンドファイル(basein.pro)の作成と編集

サンプルディレクトリー(Samples)のtcpdsamp.proまたはtcplsamp.proをbasein.proのファイル名でコピーを作成し、編集をします。

Basein.proの内容は次のようになっています。これらのコマンド・パラメーターのうち、必要に応じて次の値を変更して下さい。

●IDENTIFYコマンドの変更

IEACCOUNT ieacctにIEの顧客コードを指定して下さい。
IEUSERID ieuser01にIEのユーザーIDを指定して下さい。
IEPASSWORD iepassにIEのパスワードを指定して下さい。

●TRANSMITコマンドの変更

COMMTYPE TCP/IP専用線での接続、またはAT&Tダイヤラーを使用して、ExpediteをStartする前にTCP/IP接続をする方法は(T)を指定します。
RECOVERY リカバリー・レベルを指定します。
 ユーザーの指定が少なく、コミットのタイミングのわかりやすさでは(F)ファイル・レベル・リカバリーをお奨めいたします。(F)ファイル・レベル・リカバリー、(U)ユーザ・レベル・リカバリー、(C)チェック・ポイント・レベル・リカバリー、(S)セッション・レベル・リカバリーが指定できません。「付録A. リカバリー・レベルのコミット」を参照して最適なものを指定します。

●TRACEコマンドの追加

上記のパラメーターの変更のみで接続はできますが、テストの際はトレースを取ることをお薦めします。次のようにTRACEコマンドを追加して下さい。

```
TRACE
      CNNCT (Y)
      MODEM (Y)
      PROTOCOL (Y)
      LINK (Y)
      BASE (Y)
      IOFILE (Y);
```

* TRACEマンドの結果はiebase.trcファイルに書かれます。

プロファイル・コマンドの詳細につきましては、Programming GuideのChapter 8. Using Expedite Base for Windows profile commandsとChapter16. Using TCP/IP communicationsをご参照下さい。

またトレースにつきましては「5.2. PDのためのトレース収集」とProgramming GuideのChapter 15. Using the connectivity log and trace filesも併せてご覧下さい。

basein.pro(TCP/IP接続)の例

The identify command is used to provide information for logon

IDENTIFY

IEACCOUNT(ieacct) # replace "ieacct" with your IE account
IEUSERID(ieuser01) # replace "ieuser01" with your IE user ID
IEPASSWORD(iepass); # replace "iepass" with your IE password

TRANSMIT

COMMTYPE(T)
AUTOSTART(Y)
AUTOEND(Y)
RECONNECT(5)
COMMITDATA(37000)
MAXMSG(10)
RECOVERY(F);

TRACE

CNNCT(Y)
MODEM(Y)
PROTOCOL(Y)
LINK(Y)
BASE(Y)
IOFILE(Y);

4.3.3 メッセージ・コマンドファイル(basein.msg)の編集

サンプルディレクトリー(Sample)のbasemsg.inをbasein.msgのファイル名でコピーを作成し、編集をします。

basein.msgの内容は次のようになっています。

```
SEND FILEID(SAMPTTEST.FIL) ACCOUNT(ieacct) USERID(ieuser01) CLASS(TEST1);  
RECEIVE FILEID(SAMPTTEST.NEW) ACCOUNT(ieacct) USERID(ieuser01) CLASS(TEST1);
```

これはSAMPTTEST.FILというファイルを送信し、同時に受信したファイルをSAMPTTEST.NEWというファイルに書き込むコマンドです。ここではファイルの送信のみを行うものとし、SENDコマンドだけを変更します。

●SENDコマンドの変更

ACCOUNT ieacct に宛先のIEの顧客コードを指定して下さい。

USERID ieuser01 に宛先のIEのユーザーIDを指定して下さい。

●RECEIVEコマンドの変更

削除するか、コマンドの先頭に#を付けてコメントにして下さい。

メッセージ・コマンドの詳細につきましては Programming Guide の Chapter 9. Using Expedite Base for Windows message commands をご覧下さい。

4.3.4 セキュアIPサービスへの接続を確立

TCP/IPダイヤルアップ接続の場合には、Expediteを起動する前にAT&Tダイヤラー日本語版を起動し、セキュアIPサービスとセッションを確立してください。

4.3.5 Expedite Base for Windowsの起動

起動させる際は次のようにします。

WindowsXPを使用した場合、

[スタート]

=>[すべてのプログラム]

==>[Expedite Base for Windows]

===>[Expedite Base for Windows]を選択ください。

この操作により、[Expedite Base]ウィンドウが開きます。一度Expediteロゴ画面が出ます。C:\%WINDOWS%\win.iniファイルでAutoMode=Yを指定した場合は、IEとのセッションは開始されますが、省略値のままの場合は次のように操作して下さい。

メニューバーの[File]をクリックする。

プルダウンメニューの[Start]をクリックする。

通信中、IEとのセッションの状況が画面に表示されます。セッション終了後、もとの[Expedite Base]ウィンドウの状態に戻ります。正常終了しない場合は次のファイルにそ

の理由が記されていますのでご確認ください。

tempout.msg
baseout.pro
baseout.msg

5. Expedite Base for Windows のカスタマイズ

5.1. コマンド・ライン・パラメーターの設定

詳しくは、Programming GuideのChapter11. Understanding additional featuresの Using command line parameters with IEBASE commandをご覧ください。

コマンド・パラメーターの設定例

1. [スタート]から[ファイル名を指定して実行(R)]を選択します。
2. Expediteのパス名、実行コマンド、コマンド・パラメーターの順に指定します。
これはRESETパラメーターの指定例です。

c:¥expedite¥iebase. exe reset

3. パラメーターが有効になったExpediteのウィンドウが開きます。
4. このパラメーターは指定されている間は有効になりますので、必要が無ければ[ファイル名を指定して実行(R)]から削除して下さい。

5.2. PDのためのトレース収集

IEとセッションを確立する際にエラーがあると、セッション終了時にリターン・コードとメッセージが、出力ファイル(tempout.msg、baseout.msg、baseout.pro)に書き出されます。Programming Guideの AppendixA. Expedite Base for Windows error code and messageを参照して、エラーの原因を取り除いて下さい。

出力ファイル内のエラー・メッセージだけでエラーの原因が判断できない時は、以下のトレースを取得することができます。詳しくは Programming Guide の Chapter 15. Using the connectivity log and trace files をご参照下さい。

Expedite Base for Windowsのトレース

basein.pro に以下の TRACE Command を指定することによりトレースを収集できます。結果は Expedite Base for Windows のディレクトリー内にテキストファイルとして得られます。

TRACE

```
cnnect (Y)
display (Y)
modem (Y)
protocol (Y)
link (Y)
base (Y)
iofile (y) ;
```

iebase.trc

このトレースファイルによりホストとの IE コマンドのやり取り、サービス・マネージャーとのやり取り、モデムとのコマンドのやり取り等を見ることができます。プロファイル・コマンドファイルで TRACE コマンドを指定することにより取得できます。

注) 送受信したデータの中に EOF (End of File : 16 進数で"1A")が入っていると、メモ帳などでファイルを見た場合、最後まで表示されないことがあります。このような時は、iebase.trc ファイルからエディターを使用して EOF を取り除くことによって、トレースを最後まで見ることができます。

付録 A. リカバリー・レベルのコミット

1) ファイル・レベル・リカバリー

- ◆ リカバリー・レベルの指定
basein.proファイルのTRANSMITコマンドでRECOVERYパラメーターに(F)を指定します。RECOVERYの他のオプション(S|C|U)と共に使用することはできません。
basein.msgファイルの中では、何も指定する必要がありません。ユーザーがコミットの指定をする必要はありません。

- ◆ 中断とリカバリー
ExpediteとIEとの間のセッションが切れた場合には、送受信中ファイルの前のファイルのはじめから再開されます。セッションが切れたあとのセッションリスタート、リセットはチェック・ポイント・リカバリーと同じです。
コマンド・ライン・パラメーターでRESETコマンドを出してセッションを再開する場合には細心の注意が必要です。RESETコマンドを使用してセッションをスタートさせると、前回のセッションの続きにはならず、セッションの始めから再度送受信されます。RESETコマンドを使用してセッションを再開する場合には、COMMIT済みのファイルが二重蓄積されたり、データロストの原因となりますので、既にコミットをしたファイルをbasein.msgファイルから削除する等の処理をした上で、送受信を再開して下さい。

- ◆ チェック・ポイントとコミット
SEND時には、basein.msgファイルの一つ目のSENDコマンドが完了するタイミングで自動的にコミットがとられます。すなわち、ホストIEは収集完了とみなし、蓄積します。(COMMITコマンドを指定する必要はありません) ファイルの途中ではチェック・ポイントは取りません。
RECEIVE時には、PGファイル(IEの1メッセージ・グループ)を受信完了するタイミングでチェック・ポイントがとられ、IEは配布完了とみなしコミットを取ります。(メッセージ・グループは削除/保管されます。)
ただし、Expedite Base for Windowsでの受信ファイルが完成するのは、RECEIVEコマンドの完了時です。
basein.proファイルのMAXMSGは使用されません。

2) ユーザー・レベル・リカバリー

◆ リカバリー・レベルの指定

basein.proファイルのTRANSMITコマンドのRECOVERYパラメーターに(U)を指定します。RECOVERYの他のオプション(S|C|F)と共に使用することはできません。

basein.msgファイルの中のCOMMITコマンドによって、IEに対してコミットを送信しません。送信コマンド(SEND, SENDEDI, PUTMEMBER)が完了したあとに指定できます。書き方は以下の通りです。

```
SEND FILEID(xxxxxx. xxx) ACCOUNT(xxxx) USERID(xxxx) CLASS(xxx);  
COMMIT;
```

◆ COMMITコマンドの注意点

送信コマンド以外(例えば、RECEIVEコマンド)の後に指定した場合にはセッション28010で終了し、警告メッセージが出力されます。セッションの完了時には、COMMITコマンドが指定されていなくてもコミットされます。COMMITコマンドは、basein.proファイルにRECOVERY(U)の指定がないと無効です。

◆ 中断とリカバリー

ExpediteとIEとの間のセッションが切れた場合には最後にチェック・ポイントを取られた後のデータから送受信が再開されます。

コマンド・ライン・パラメーターでRESETコマンドを出してセッションを再開する場合には細心の注意が必要です。RESETコマンドを使用してセッションをスタートさせると、前回のセッションの続きにはならず、セッションの始めから再度送受信されず。RESETコマンドを使用してセッションを再開する場合には、COMMIT済みファイルの二重蓄積や、データロストの原因となりますので、既にコミットをしたファイルをbasein.msgファイルから削除する等の処理をした上で、送受信を再開して下さい。

◆ チェック・ポイントとコミット

SEND時には、basein.msgのCOMMIT;で指定したタイミングでコミットがとられます。すなわち、ホストIEは収集完了とみなし、蓄積します。COMMITコマンドの指定がない場合には、basein.msgファイルの最後のファイルが送信された後で自動的にCOMMITコマンドを付加送信します。TRANSMITコマンドのCOMMITDATAパラメーターは無効です。ファイルの途中でチェック・ポイントは取られません。

RECEIVE時には、basein.proファイルでRECOVERY(C)(チェック・ポイント・レベル・リカバリー)を指定した場合と全く同じです。

すなわち、チェック・ポイントはTRANSMITコマンドのMAXMSGで指定した数のメッセージ単位で取られ、コミットは1メッセージ・グループを受信完了するタイミングでIEが配布完了とみなし、コミットを取るとともに、メッセージ・グループは削除/保管されます。

ただし、Expedite Base for Windowsでの受信ファイルが完成するのは、RECEIVEコマンドの完了時です。

3) チェック・ポイント・レベル・リカバリー

basein.proファイルのTRANSMITコマンドのRECOVERYパラメーターに(C)を指定します。チェック・ポイント・レベルは、セッション中にコミット要求とコミット応答をやりとりし、チェック・ポイント番号でコミットしています。すなわち、チェック・ポイントはTRANSMITコマンドのMAXMSGで指定した数のメッセージ単位で取られ、コミットは1メッセージ・グループを受信完了するタイミングでIEが配布完了とみなし、コミットを取るとともに、メッセージ・グループは削除/保管されます。

ただし、Expedite Base for Windows での受信ファイルが完成するのは、RECEIVEコマンドの完了時です。IEとのセッション中に異常終了した場合、Expedite Base for Windows は、チェック・ポイント番号を保持しており、セッションを再開する場合、最終チェック・ポイント番号以降のメッセージの送受信を行います。セッションが異常終了し、再開する場合、ユーザーは特に考慮する必要はありません。ただし、Expedite Base for Windowsは次のファイルを使用してメッセージ送受信を再開しますので、これらを変更しないようにして下さい。

```
basein.msg  
baseout.msg  
session.fil  
rcvfiles.fil  
rcvofset.fil
```

前回のセッションが異常終了し、ファイル情報をリセットしたい場合は、コマンド・パラメーターのRESETパラメーターをプログラムマネージャから指定し、iebase.exeコマンドを実行して下さい。

RESETパラメーターを指定することにより、チェック・ポイント番号および受信ファイル情報等を保持している次のファイルは削除され、IEとセッションを開始します。

```
session.fil  
rcvfiles.fil  
rcvofset.fil
```

ただし、このRESETパラメーターをそのまま指定しておく毎セッションがリセットされてチェック・ポイント・レベル・リカバリーが実行されませんので、必要の無い時はパラメーターを削除しておいて下さい。

チェック・ポイント・レベルの回復については、Programming Guideの Checkpoint-level recoveryをご参照下さい。

4) セッション・レベル・リカバリー

basein.proファイルのTRANSMITコマンドのRECOVERYパラメーターに(S)を指定します。セッションを最初からやり直します。専用回線など、回線切れの少ない場合に適していません。データをセッションのはじめからすべて送り直す方法です。ダイヤル回線でも量の少ない場合には、この方法でも構いません。セッション・レベル・リカバリーでは1セッションで1000個以上のファイルを送受信することはできません。EDIデータの場合にはもし複数EDIエンベロップを一つ目のファイルとしていても各EDIエンベロップを一つのファイルと数えます。

付録 B. リカバリー・レベルと送信／受信フロー

説明のためにExpedite Base for Windowsで伝送サイズ3700バイトに設定しています。

A. <PROFILE COMMAND>

1. RECOVERY (S/F/U/C)
 - S : セッション・レベル・リカバリー
 - F : ファイル・レベル・リカバリー
 - U : ユーザー・レベル・リカバリー
 - C : チェック・ポイント・レベル・リカバリー
2. MSGSIZE (xxxxx)
 - 送信ファイルをxxxxxバイト毎に区切り送信します。
 - SEND時のみに有効となります。
3. COMMITDATA (XXXXX)
 - 送信時、XXXXXバイト送信毎にコミット・コマンドをIE/EXに送ります。
 - SEND時で、チェック・ポイント・リカバリーの時のみ有効となります。
4. MAXMSGS (XX)
 - 受信時、メッセージ・セグメント数XX毎にコミット要求を送る様にIE/EXへ要求します。
 - RECEIVE時で、ユーザー・レベル／チェック・ポイント・リカバリーの時に有効

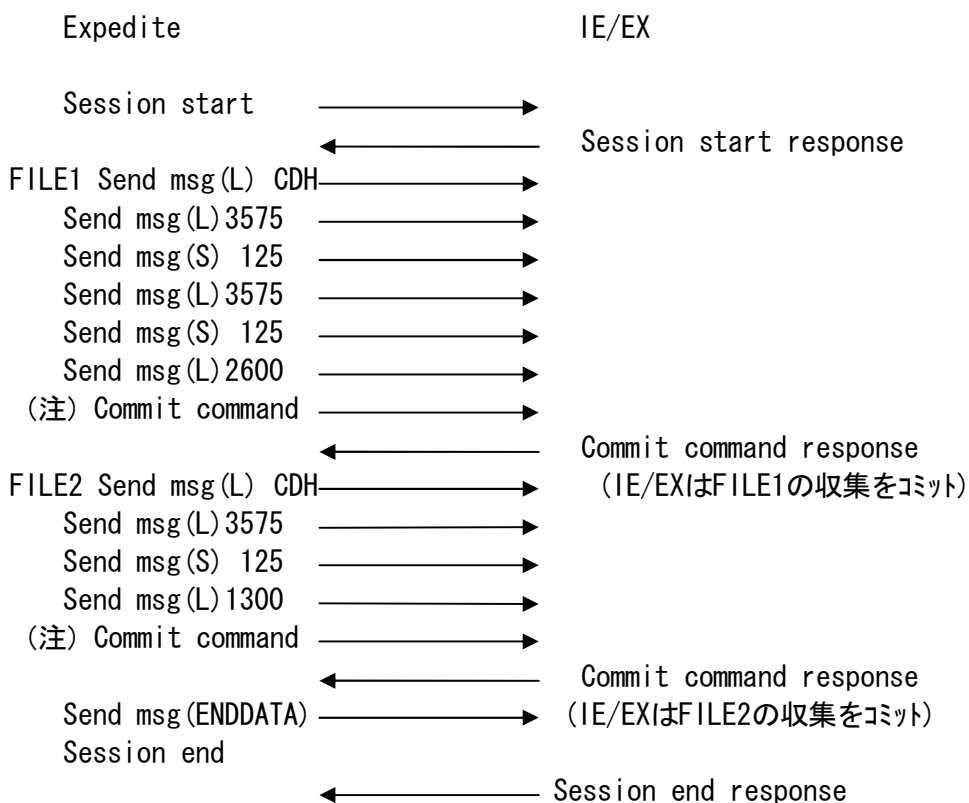
B. <MESSAGE COMMAND>

1. SEND
 - IE/EXへメッセージを送信します。
2. RECEIVE
 - IE/EXからメッセージを受信します。
3. COMMIT
 - SEND時、指定したタイミングでIE/EXへコミット・コマンドを送ります
 - SEND時、ユーザー・レベル・リカバリーの時に指定します

ファイル・レベル・リカバリー SEND

IEでは回復レベル 'G' として扱われます。

<p>A. Profile Command File MSGSIZE (3700) RECOVERY (F)</p>	<p>B. Message Command File SEND FILEID(FILE1.xx) 10000 Bytes SEND FILEID(FILE2.xx) 5000 Bytes</p>
--	---



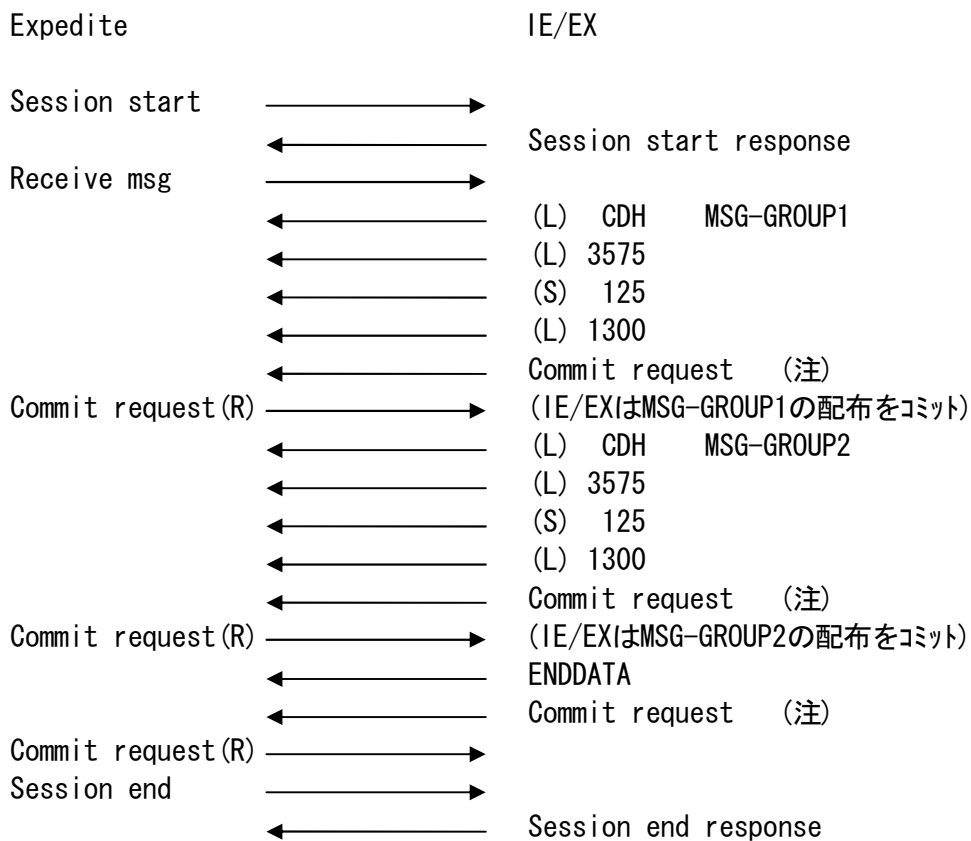
(注) : Expedite Baseが、ファイルの送信終了毎に自動的に作成します。

ファイル・レベル・リカバリー RECEIVE

IEでは回復レベル 'G' として扱われます。

A. Profile Command File B. Message Command File
 RECOVERY (F) RECEIVE FILEID (FILE1.XX)

蓄積あり: MSG-GROUP1 5090 Bytes (CDH, 3700, 1300の3メッセージ)
 MSG-GROUP2 5090 Bytes (CDH, 3700, 1300の3メッセージ)

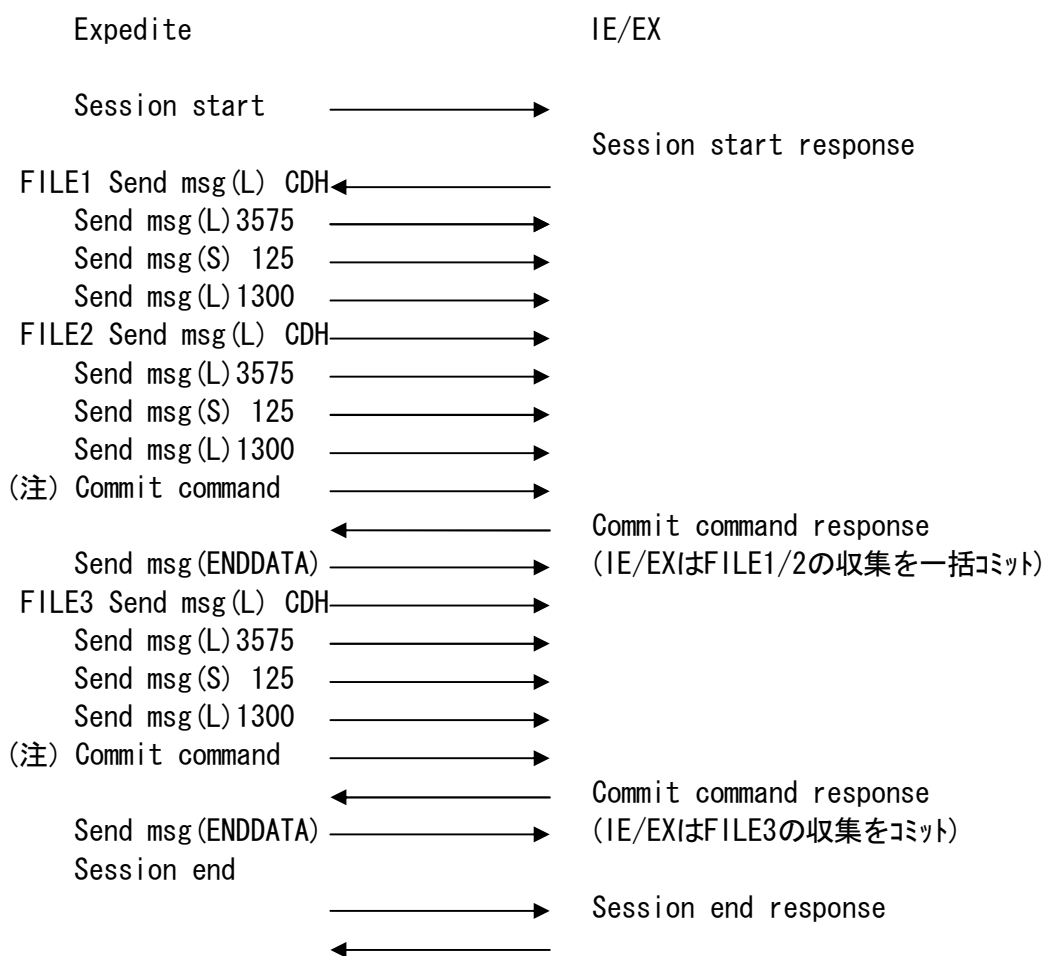


(注) : IE/EXはメッセージ・グループの終わりでコミット要求を送ります。

ユーザー・レベル・リカバリー SEND

IEでは回復レベル 'C' として扱われます。

<p>A. Profile Command File</p> <p>MSGSIZE (3700)</p> <p>RECOVERY (U)</p>	<p>B. Message Command File</p> <p>SEND FILEID(FILE1. xx) 5000 Bytes</p> <p>SEND FILEID(FILE2. xx) 5000 Bytes</p> <p>COMMIT</p> <p>SEND FILEID(FILE3. xx) 5000 Bytes</p>
--	--



(注) : Message Command Fileの指定した箇所でコミット・コマンドを送ります。
 また最終ファイルを送信後には、自動的にコミット・コマンドを作成します。

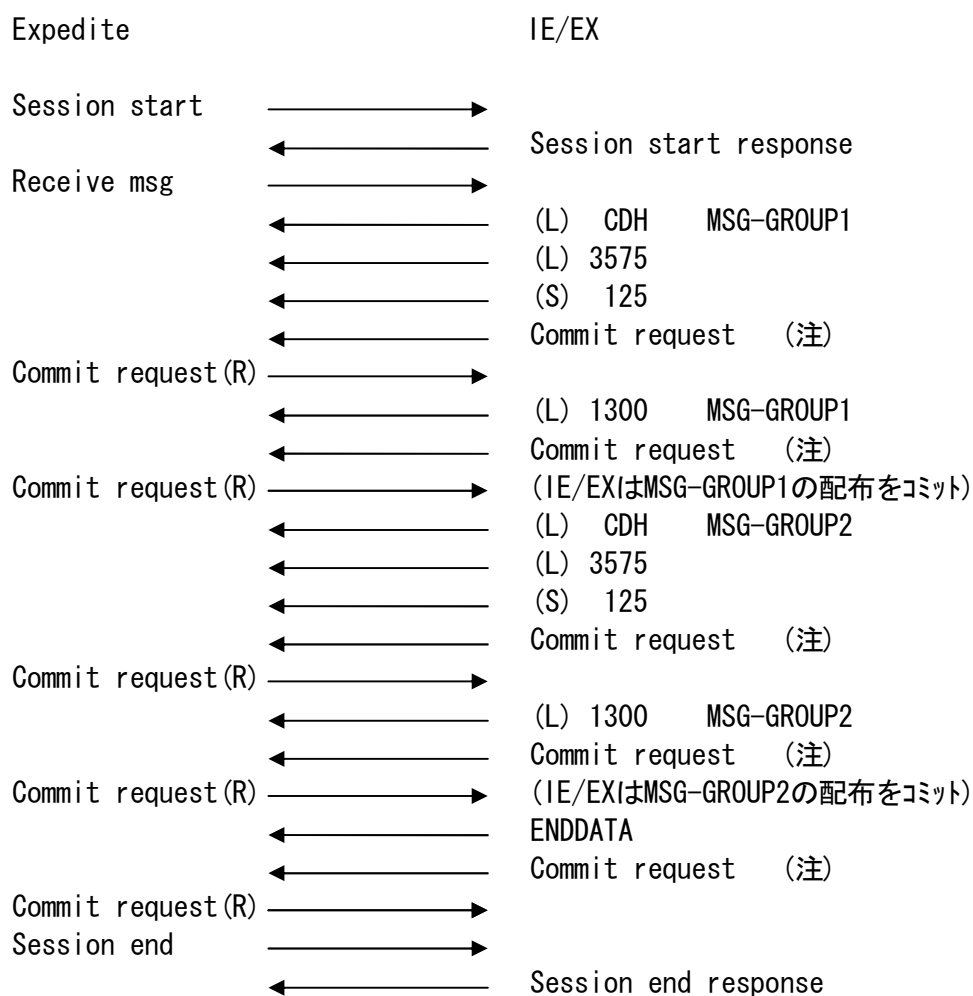
ユーザー・レベル・リカバリー RECEIVE

IEでは回復レベル 'C' として扱われます。

A. Profile Command File	B. Message Command File
MAXMSG (2)	RECEIVE FILEID (FILE1. XX)
RECOVERY (U)	

蓄積あり: MSG-GROUP1 5090 Bytes (CDH, 3700, 1300の3メッセージ)
 MSG-GROUP2 5090 Bytes (CDH, 3700, 1300の3メッセージ)

メッセージ・フローは、チェック・ポイント・レベル・リカバリー RECEIVE と同じです。

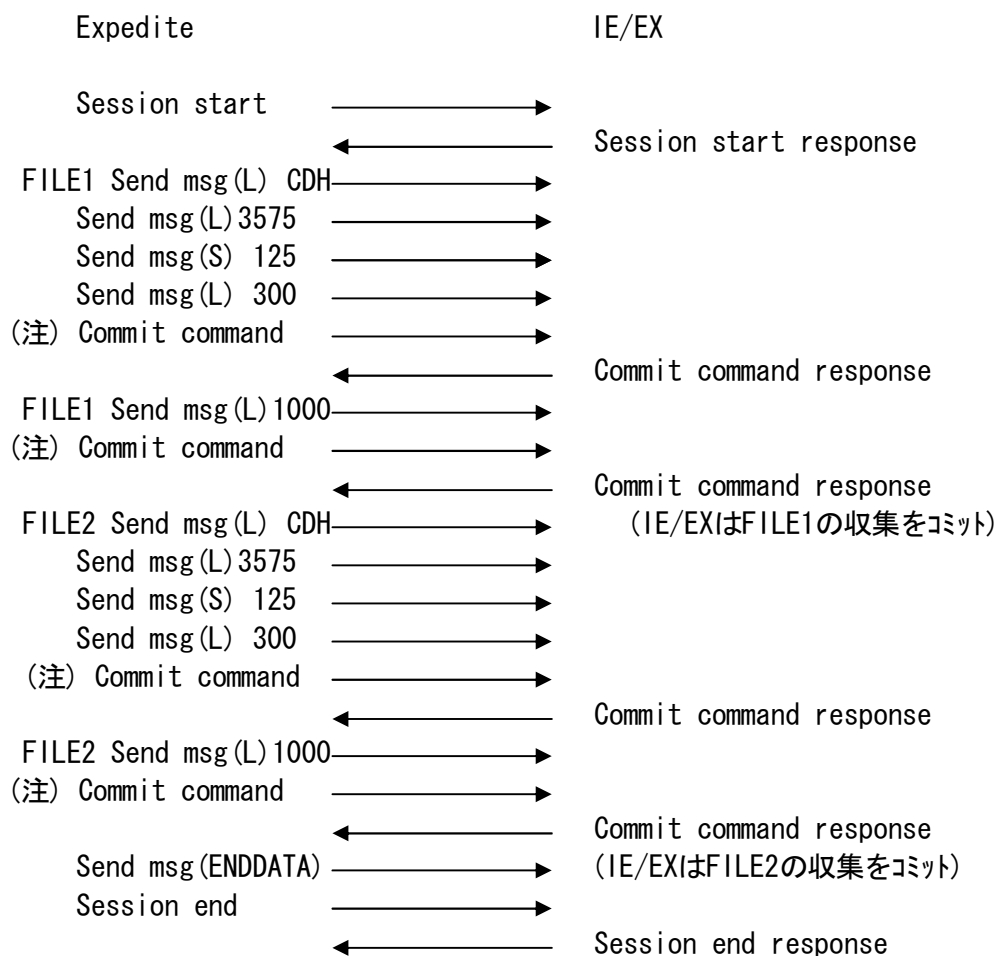


(注) : IE/EXはExpediteのMAXMSG指定に従ってコミット要求を送ります。
 また、各メッセージ・グループの終わりにもコミット要求を送ります。

チェック・ポイント・レベル・リカバリー SEND

IEでは回復レベル 'C' として扱われます。

<p>A. Profile Command File</p> <p>MSGSIZE (3700)</p> <p>COMMITDATA (4000)</p> <p>RECOVERY (C)</p>	<p>B. Message Command File</p> <p>SEND FILEID (FILE1. xx) 5000 Bytes</p> <p>SEND FILEID (FILE2. xx) 5000 Bytes</p>
---	--



(注) : Expedite Baseが、COMMITDATAの指示に従って、IE/EXへコミット・コマンドを送ります。
また、ファイルの終りにもコミット・コマンドを送ります。

チェック・ポイント・レベル・リカバリー R E C E I V E

I Eでは回復レベル 'C' として扱われます。

A. Profile Command File

MAXMSGs (2)

RECOVERY (C)

B. Message Command File

RECEIVE FILEID (FILE1. XX)

蓄積あり: MSG-GROUP1 5090 Bytes (CDH, 3700, 1300の3メッセージ)

MSG-GROUP2 5090 Bytes (CDH, 3700, 1300の3メッセージ)

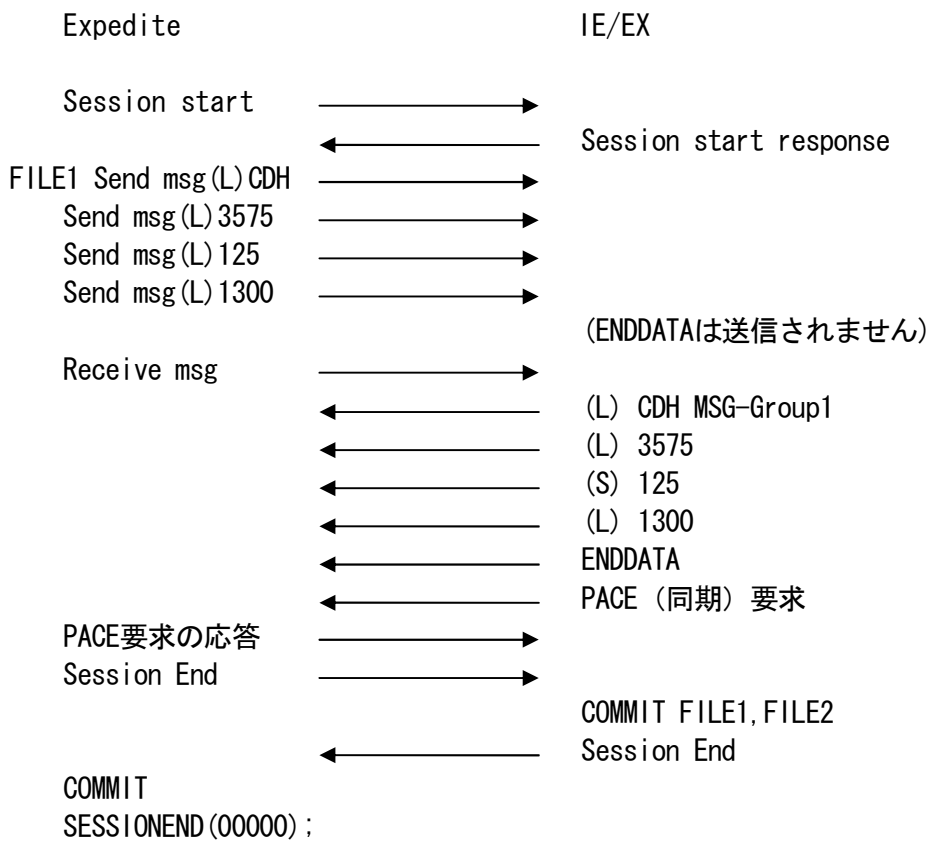
メッセージ・フローは、ユーザー・レベル・リカバリー R E C E I V E と同じです。

セッション・レベル・リカバリー SEND/RECEIVE

IEでは回復レベル 'X' として扱われます。

A. Profile Command File	B. Message Command File
MSGSIZE (3700)	SEND FILEID(FILE1.XX) 5000Byte
RECOVERY (S)	RECEIVE FILEID(FILE2.XX) 5000Byte

蓄積あり: MSG-GROUP1 5090 Bytes (CDH, 3700, 1300の3メッセージ)



EDIサービス
<IE/EX>
<国際IE>

Expedite Base for Windows
バージョン4.7.2補足説明書

GXS株式会社